

愛知学院大学考古学発掘調査報告30

岐阜県可児市

# 古城山窯跡

第2次発掘調査概要報告書

2020.3

愛知学院大学文学部歴史学科

# 例 言

- 1 本書は、岐阜県可児市兼山古城山1418番10・11に所在する兼山窯・古城山窯跡の第2次発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は可児市が主体となり、愛知学院大学文学部歴史学科考古学コース教授藤澤良祐がこれに協力するという体制で実施した。第2次調査は、3年次の「考古学専門実習B」の専攻生である加藤怜・子安優翼・坂井航・下田大真・福田治也・万年美紀・山田美咲、2年次の「考古学基礎実習B」の専攻生である大平悠希・荻野貴史・梶浦剛史・加藤悠華・栗山美里・杉村有亮・洲崎拓真・寺井崇浩・兵藤美江・水野啓吾・森本帆乃夏の参加のもと、平成30年8月13日から8月25日にかけて実施した。
- 3 発掘調査にあたって、可児市教育委員会文化財課の長江真和氏をはじめ、丸山組・元久々利組の皆様には調査に対してご理解をいただき格別なご配慮を賜った。なお発掘調査には、本学非常勤講師の中野晴久、文学研究科研究員の山本智子、同大学院生の森まどか・高野夏姫・田崎夢佳・成瀬陽介・野村啓輔、同修了生の森村知幸・伊藤真央・田中良、本学卒業生の北岡久実・福田真也、学部4年生の赤山樹里・大森裕朗・川端ちえ美・山田紗希、本学考古学研究会の杉山歩夢・下村圭弘・天草光咲・石津琳那・藤森彩乃・蛭澤伸・佐橋圭吾・藤村晃・菱田百花の参加を得た。
- 4 出土遺物の整理および報告書の作成は、引き続き専攻生によって4年次の「考古学専門演習B」、および3年次の「考古学基礎演習B」において、平成30年9月から令和2年1月にかけて実施した。また令和元年9月からは2年次の「考古学基礎講読B-II」の一環として、天草光咲・石津琳那・岩田紫苑・大野裕介・小澤悠輝・佐橋圭吾・鷺見采香・関尾美紅・永井碧・中村匠吾・西川祐奈・早川絃布・疋田朱音・菱田百花・藤森彩乃・榎美亜・渡邊月乃が参加した。
- 5 本書は専攻生が分担して執筆し、執筆者名は各文末に記した。編集は研究員の山本智子が行った。なお報告書作成にあたっては、可児市文化財課の長江真和氏に多大なるご助力をいただいた。
- 6 発掘調査に係わる記録類は、愛知学院大学文学部歴史学科考古学整理室に保管している。
- 7 本書には付編として「牟田洞窯跡第2次調査2グリッド出土の現代遺物について」を掲載した。

# 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 古城山窯跡の研究抄史	4
第4章 発掘調査の経過（発掘調査日誌）	7
第5章 検出された遺構	9
第1節 周辺地形と調査区の設定	9
第2節 1号窯の状況	9
第3節 1グリッドの状況	13
第4節 各トレンチの状況	14
第6章 出土遺物の概要	16
第1節 大形壺甕類	16
第2節 片口鉢他	18
第7章 小結	21
付編 牟田洞窯跡第2次調査2グリッド出土の現代遺物について	22
引用・参考文献	27

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図	岐阜県可児市位置図 ……………	1
第2図	古城山窯跡周辺遺跡分布図 ……………	2
第3図	古城山窯跡周辺の地質図 ……………	3
第4図	東海地方の中世窯位置図 ……………	6
第5図	古城山窯跡地形測量図 ……………	10
第6図	古城山1号窯窯内埋土土層断面図 ……	11
第7図	1グリッドサブトレンチ遺構実測図 ……	13
第8図	Cトレンチ南端遺構実測図 ……………	14
第9図	Dトレンチ遺構実測図 ……………	15
第10図	古城山窯跡出土遺物実測図(1) ……	17
第11図	古城山窯跡出土遺物実測図(2) ……	18
第12図	牟田洞窯跡第2次調査 2グリッド出土遺物実測図 ……………	26

## 表目次

表1	古城山窯跡出土遺物計測表 ……………	19
表2	古城山窯跡出土遺物台帳 ……………	20
表3	牟田洞窯跡第2次調査 2グリッド出土遺物計測表 ……………	25

## 写真図版目次

図版1	古城山窯跡第2次調査遺構(1) ……………	29
図版2	古城山窯跡第2次調査遺構(2) ……………	30
図版3	古城山窯跡第2次調査出土遺物(1) ……	31
図版4	古城山窯跡第2次調査出土遺物(2) ……	32
図版5	牟田洞窯跡第2次調査 2グリッド出土遺物(1) ……	33
図版6	牟田洞窯跡第2次調査 2グリッド出土遺物(2) ……	34
図版7	牟田洞窯跡第2次調査 2グリッド出土遺物(3) ……	35
図版8	牟田洞窯跡第2次調査 2グリッド出土遺物(4) ……	36

# 第1章 発掘調査に至る経緯

愛知学院大学文学部では、平成14年度に歴史学科に考古学コース（先史考古学・歴史考古学）を開講し、新入生が3年次となる平成16年度には、考古学の基礎技術を習得するための必修科目として「考古学実習」を開講し、合宿形式により遺跡の発掘調査を実施することになった。そして平成18年度からはより高度な技術習得のため、従来の「考古学実習」を、2年次の「考古学基礎実習」と3年次の「考古学専門演習」に分離し、2年次から発掘調査に参加することになった。調査地の選定にあたって、本学が所在する東海地方は古代以来の窯業生産の中心地域で、数多くの窯跡が分布し古くから考古学的調査が行われていること、近年では中世窯・近世窯の生産や流通に関する調査研究が盛んであることから、歴史考古学専攻では窯業遺跡の発掘調査を実施したいと考えていた。

はじめに発掘調査に着手したのは岐阜県中津川市に所在する中津川窯で、中世中津川窯は昭和33年に発掘調査が初めて実施され研究の歴史が古いにも拘らず、生産の実態について不明な点が多いことから、中津川市教育委員会の協力のもと、考古学実習の初年度に当たる平成16年度には尻無1号窯跡の試掘調査を、平成17年度には上県2号窯跡の試掘調査を実施した。このうち上県2号窯跡は窯の遺存状況が良好であったため、平成18年度から平成24年度にかけて5基の窯の発掘調査を行い、平成25年度には実測図を作成し一応の調査が終了した（愛知学院大学2006～2015）。

続いて実施したのは岐阜県可児市に所在する大萱窯跡群の発掘調査である。可児市教育委員会では岐阜県指定史跡である大萱窯跡群の国指定史跡を目指しており、協力して発掘調査を実施して欲しいとの打診があった。大萱窯跡群は牟田洞・大萱窯下・弥七田の3窯跡から構成されるが、昭和初期に荒川豊蔵氏や加藤唐九郎氏によって調査され、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といった桃山茶陶を生産した窯跡群として著名である。正式な学術調査は実施されていないため遺跡や遺構の実態については不詳であった。そこで歴史考古学専攻では、可児市教育委員会に協力するという体制で「考古学実習」を実施し、平成25・26年度には牟田洞窯跡、平成27・28年度には弥七田窯跡の発掘調査を行い、大萱窯跡群の一応の調査が終了した（愛知学院大学2016～2018）。

そして平成29年度、引き続き可児市に所在する兼山窯・古城山窯跡の発掘調査に着手することになった。古城山窯跡は中津川窯と同様、大形壺甕類を焼成した中世窯として以前から注目されており、昭和42年には発掘調査が行われているが、調査は中断されたようで遺跡や遺構の詳細は不明であった。歴史考古学専攻では、平成29年度には地形測量図を作成するとともに、3本の試掘坑を設定することにより2基の窖窯の存在を確認し（愛知学院大学2019）、平成30年度には南側に構築された1号窯の窯体部の調査に着手した。（藤澤良祐）

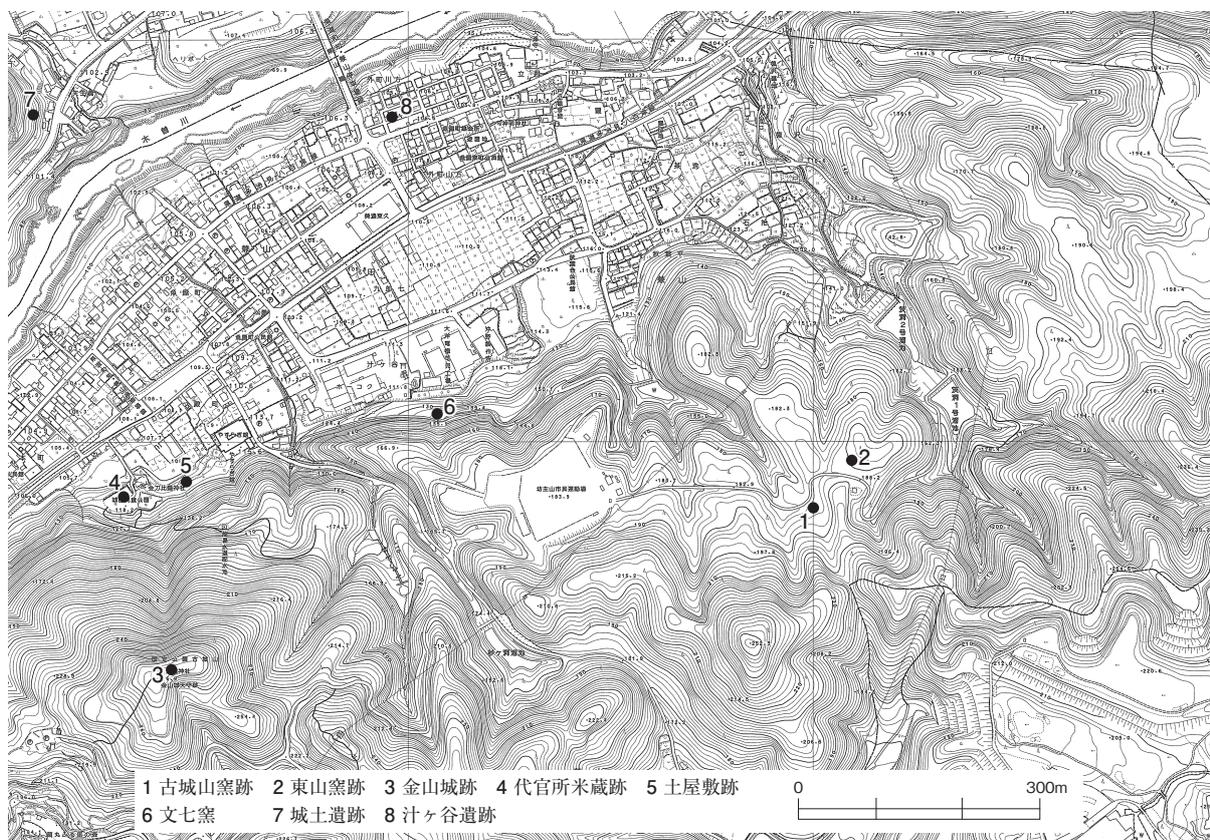


第1図 岐阜県可児市位置図

## 第2章 遺跡の立地と環境

岐阜県可児市は、岐阜県の中南部に位置し、中部圏の中心都市である愛知県名古屋市および岐阜県の県庁所在地である岐阜市から30km圏内で、1982年に市制を施行し可児市が誕生した。2005年に可児郡兼山町を合併し現在に至り、北西部は木曾川を挟んで美濃加茂市、北東部は加茂郡八百津町、東部は可児郡御嵩町・土岐市、南部は多治見市、西部は愛知県犬山市と接し、面積は87.57km<sup>2</sup>である。ただし、古城山窯跡は旧可児郡兼山町に所在するため、ここでは旧可児郡兼山町周辺の地形と地質について概述する。

旧可児郡兼山町は可児郡北端に位置し、北部は木曾川を挟んで美濃加茂市、北東部は加茂郡八百津町、南部・西部は可児郡御嵩町と接している。掌状地である太田盆地の一部で、木曾川は上流に向かうにつれ川幅が極端に狭くなり、峡谷のように深い谷の兼山<sup>とろどろ</sup>をつくっている。太田盆地は大部分が河岸段丘からなり、河岸段丘上に町家が並んでいる。これは地形から兼山段丘と呼ばれ、木曾川の堆積物をほとんどもたず、大部分が硬い基盤岩石の露出した土壌層のうすい岩石段丘である。兼山段丘は上・下2段の段丘になっており、背後には基盤岩石を露出した古城山がある。古城山(277.2m)は、標高は低いが険しい壮年期の山で、北は木曾川の谷にのび、南は比較的なだらかにのびている。西は高根山から、東は坊主山へと山並みが連なっている(兼山町1972)。



第2図 古城山窯跡周辺遺跡分布図(岐阜県教育委員会1990より作成)

兼山町の地質は、兼山段丘の基盤岩石である古生層に代表される。一般に化石を含まない硬い岩石からなる秩父古生層を基盤として、新第三紀の瑞浪層群・瀬戸層群、第四紀の木曾川泥流などの堆積物が周辺に分布している。この秩父古生層は砂岩・粘板岩・チャートの層が層を形成し、八百津町境などでは古生層の上に礫と粗い砂粒が混じった礫層があらわれる。また、西は可見盆地にあった内陸湖（古可見湖）の端で砂質粘土層である可見夾炭層が露出し、木曾川付近では木曾川の堆積物である円礫層がみられる（兼山町1972）。古城山窯跡は秩父古生層の主に砂岩層に立地している。

周辺の遺跡は汁ヶ谷遺跡(8)と、加茂郡八百津町に所在する城土遺跡(7)は縄文時代早期の遺跡とされ格子目文押型文土器片が採集されている。中近世の遺跡は金山城跡(3)、代官所米蔵跡(4)、土田屋敷跡(5)である。金山城は安土桃山時代に森長可の居城として知られており、代官所米蔵跡は石塁が当時のまま遺存している。江戸時代以降は東山窯跡(2)、文七窯跡(6)が確認されている。東山窯跡は古城山窯跡からおよそ100m東の付近に立地し、飴釉の平小鉢の破片や鉄釉・青織部・御深井釉・黄瀬戸系の小鉢や壺類の陶片が出土したという（兼山町1972）。文七窯跡は、文化元年（1844）に窯ヶ根窯の窯株を兼山の藤掛文七が譲り受けて開窯した。およそ30数年継続した窯で漆黒釉陶器、灯明具、磁器製品が出土している。昭和41年の架橋工事により滅失している（兼山町1972・可見市2007）。

（愛知学院大学2019）



第3図 古城山窯跡周辺の地質図（通商産業省1991より作成）

### 第3章 古城山窯跡の研究抄史

可児市兼山町に立地する古城山窯跡は、壺甕類を主体に生産した中世窯として知られている。昭和42年12月に当時多治見市古窯調査委員を務めていた竹内蘭山氏の指導により、1号窯の発掘調査が行われた。翌年には竹内氏は調査の中間報告をまとめ、翌々年に最終報告書を作成している（竹内1968・1969）。同氏の報告によれば、この窯跡は4基の窯から成るとみられ、この他東山地区には1～2基の窯跡が存在するとしてこれらを併せて「兼山古窯址群」と名付けている<sup>(註1)</sup>。

成果として、1号窯は全長10m余、最大幅2.08mで、窯体についても天井部は崩落しているが、側壁は最も状態の良いところで高さ1m程残存しているほか、床面・分炎柱についても良好に残存していることが確認された。分炎柱については、長径83cm、短径63cmの楕円形を呈し、残存高は71cmで、床面については燃焼室が約10°、焼成室が約23°の傾斜であったという。また、ダンパーについては注意深く観察したものの確認することができなかったと記されている。

出土遺物についても触れ、窯体実測図と併せて一部遺物実測図も掲載されている。1号窯は主に壺・甕を中心に焼成し、これらの出土破片数はおよそ400点に及んだという。一方、片口鉢・山茶碗類は極少量で、山茶碗については美濃の土を使用していることは認めているが、あまり上作ではない点、出土点数が少ない点、割れた断面に自然釉が掛かっている点などから、1号窯の製品ではなく搬入されたものとしている。

竹内氏は、甕の口縁部の形状がN字状を呈し常滑窯のものに類似することや、窯体の構造などからこの窯の操業を鎌倉時代としている。また、①この窯跡の特徴として燃焼室の奥行が狭い点、②煙道部があまり焼けていない点、③窯内の出土遺物の焼成が不足している点などを指摘し、このうち②と③の問題は①に起因するとした。また、当時の兼山という地における情勢について、「当時すでに陶業が盛に行われ、木曾川を利用して、船積みされていたことを思うとき、これ等陶工の集団が丘陵地帯をどう利用していたか、荘園制支配下に置ける土地所有の中で、その行動の許される範囲を明確にしていくなれば、平安・鎌倉、その頃の兼山が決して、草深い寒村ではなく、商品経済盛んで庶民の生活も想像以上に充実していたことが考えられる。」と記している（竹内1969）。

なお、調査担当者である荒井金一氏は調査日誌の中で、1号窯に北側に隣り合って築かれた窯について触れ、これを2号窯と記している（荒井1968）。2号窯は、全長約10m余の1号窯に対し全長約14.5mと長大であるという。1号窯の出土遺物については、歪みは大きいが同一個体と思われる大甕1点、甕破片約400点、焼台約20点、山茶碗片2点、すり鉢（片口鉢か）1点とあり、2号窯の出土遺物については、復元可能な中甕1点、甕破片約100点、砥石1点、叩石1点などと記されている。また、1号窯は焼成不足のものが多いことに対して2号窯のものは完全に焼けたもので灰釉（自然釉か）がかかったものばかりであることについても注目している<sup>(註2)</sup>。

その後、『兼山町史』編纂にあたり、荒井氏が竹内氏の報告を再編集している（荒井1972）。ここでは中世美濃国内の甕生産について触れ、古城山窯と同様に常滑窯の技術を導入した窯業地として中津川窯の存在に注目している。その際、2号窯から出土した中甕の接合・復元した状態の写真が掲載されているが、出土遺物以外の部分で2号窯についての記述はみられなかった。また、荒井氏は木曾川を利用した水運についても言及し、当時の兼山町が木曾川舟航とにらみ合わせて商品経済が盛んで庶民の生活も想像以上に充実していた可能性を指摘している。

さて、同窯跡についてはその後1976年刊行の『美濃の古陶』で、楢崎彰一氏によって美濃地方で中津川窯の他に壺・甕生産が行われた窯跡として紹介されている(楢崎1976)。また、中島勝国氏、奥磯栄麓氏は窯体構造図を再掲載し、窯体構造や出土遺物についての概要を報告しており、木曾川の水運についても触れ、同窯の性格を明確にするためには製品の流通を究明する必要があると指摘している(中島・奥磯1976)。

藤澤良祐氏は1993年発行の『東海の中世窯』で古城山窯跡について紹介し、出土遺物に関しては、常滑窯に酷似したN字状口縁の甕類が多量に出土したことから、「工人集団の移動を含めた常滑窯からの直接的な技術導入」による成立を想定している(藤澤1993)。また、口縁部の形状から操業年代について13世紀中葉からはじまり、13世紀後半代にピークを迎えるとした。なお、12世紀中葉に常滑系の甕を生産した三河地域の足助窯について、古城山1号窯と時期は異にするものの、両者ともその成立以前に山茶碗生産が認められず、窯業地としても短時間で廃絶するという共通点も見出している。

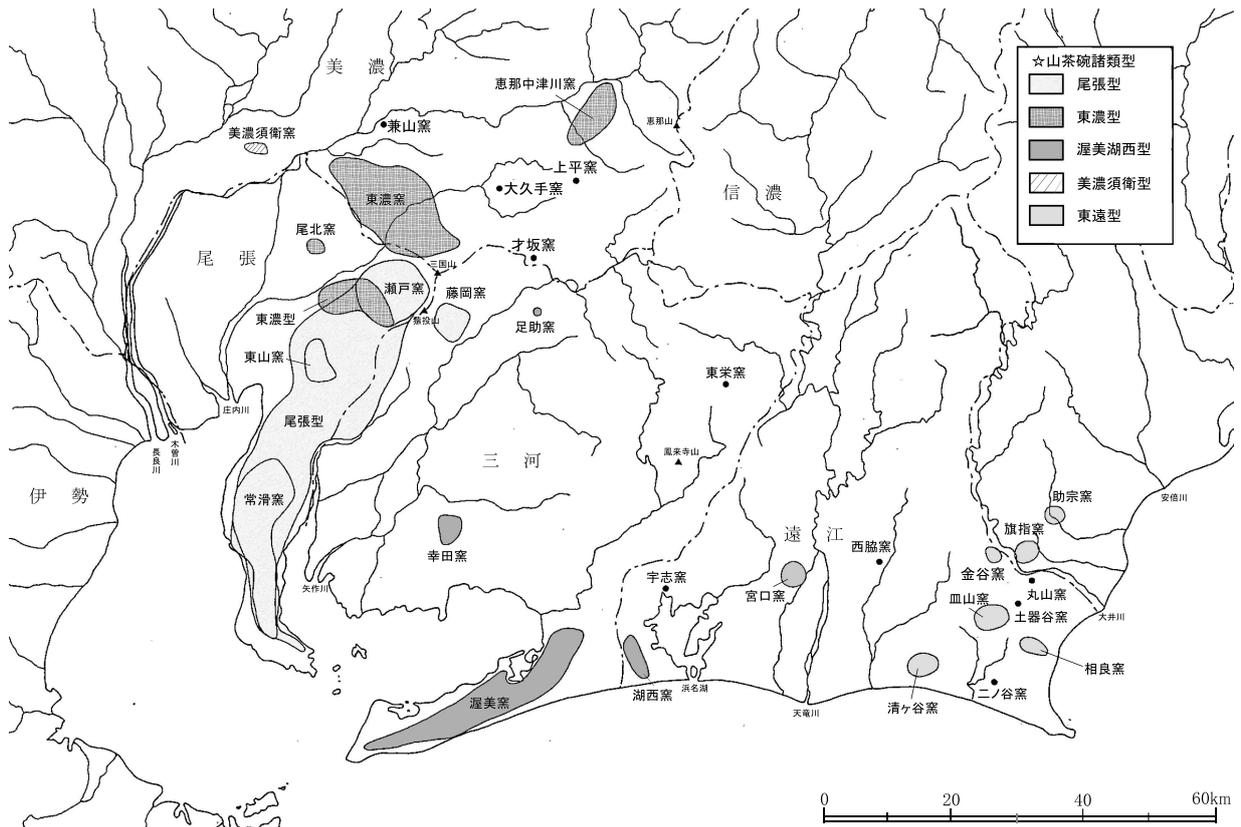
中野晴久氏は、古城山1号窯の窯体が全長14mほどで、焼成室長も10mである点について、大型品の集約的生産に向けて改良された13世紀代の常滑窯の窯体構造と一致する点を指摘し、出土遺物からみても13世紀中葉以降の常滑窯から強い影響を受け、工人レベルで直接的な技術移植があった可能性が高いとしている(中野1996)。さらに、中野氏は同書の中で瓷器系中世窯の技術系譜を整理し、古城山1号窯を常滑窯(第2群C類)の影響を受けて成立した窯業地として中津川窯などとともに第3群c類と位置づけている。

さらに、2010年に長瀬治義氏は同窯の窯体構造図と遺物実測図を再掲載し、焼成された甕の口縁部の形態から、常滑編年6a型式と類似し、鎌倉時代中期頃の操業と推測している(長瀬2010)。山茶碗との併行関係からみると窯洞期にあたるが、山茶碗類の出土数がわずかであることから併焼の可能性は低いとみている。窯場設置の意義としては、中津川窯に所属する中洗井北古窯跡と同様、常滑窯からすると遠隔且つ単発的であり、広がりも継続性もみられないことから、特定遠地の常滑系製品の需要に応えたものと解釈している。また、竹内氏と同様、戦国期に木曾川最上流に設けられた兼山湊の存在にも注目している。

近年では、愛知学院大学文学部歴史学科により、中津川窯の尻無1号窯跡や上県2号窯跡の発掘調査が行われている。この調査研究の一環で古城山窯跡の踏査、遺物採集を行い、過去の報告を踏まえて再報告している<sup>(註3)</sup>(山本2013)。古城山窯跡出土資料と採集資料のうち、主要生産器種である甕類をその口縁形態からA・B類に大別、さらにそれぞれ1・2類に細分した(山本2013)。甕B類については常滑窯の製品と特に類似性が高く、常滑編年の第5型式期に併行するものであるとし、甕A類については口縁部の形状や縁帯幅などから甕B類より古い様相を呈するとした<sup>(註4)</sup>。また、古城山窯跡の出土とされる山茶碗については、窯洞期と白土原期に比定した。

竹内氏・荒井氏によって発掘調査が行われてから50年以上が経過し、関連が指摘される常滑窯をはじめ東海の中世窯の研究が進められてきた今日、愛知学院大学では古城山窯跡の遺構や遺物の実態を正確に把握するため、2017年より同窯跡の学術発掘に着手した(愛知学院大学2019)。(山本智子)

- 註1 中間報告の時点では古城山古窯群としている。
- 註2 古城山2号窯については中間報告の中でその調査に着手し作業半ばであると記されているが、1969年の第1号窯の最終報告の中では2号窯についての記載はみられない。
- 註3 1号窯の遺構実測図について、竹内氏の報文に記される数値と、掲載されている実測図が一致しないため、図面を計測し直した数値に合わせて再報告を行った。しかし、平成30年に行った第2次調査により、実際には報文中の数値が正しく、実測図の縮尺が誤っていたことが判明した。
- 註4 この再報告のなかで、山本は甕A類に類似するものが常滑製品にみられないとしたが、常滑窯の報告書を精査したところ槍場・御林窯跡群の報告書のなかで中野氏によって行われた甕口縁部の分類のうち、A類とされるものの中に古城山窯跡の甕A類と類似するものが見受けられた(中野1985)。



第4図 東海地方の中世窯位置図

## 第4章 発掘調査の経過（発掘調査日誌）

8月13日（月） 晴れのち雨

9時に愛知学院大学考古学整理室に集合し、9時55分に出発した。10時10分ごろ瀬戸市広久手F窯跡へ器材を搬入し、窯体内の土囊上げ、立木の伐採を行った。その後14時30分ごろ古城山窯跡に到着した。器材の搬入、各トレンチの土囊上げ、窯跡周辺の草刈りを行った。

8月14日（火） 晴れのち雨

午前中は引き続き窯跡周辺の草刈りと腐葉土の除去を行った。午後からはA班とB班に分かれ、1号窯の割付けを行った。A班は1号窯、B班は2号窯の煙道部上方と焚口下方に杭を打つことによって中軸線を設定し、煙道部側の杭から左右に90度振り、南北2mずつ杭を打った。また、B班は新たなトレンチの設定に備え、2号窯の中軸線とCトレンチの東側が交差する点から1mの地点に釘を打った。

8月15日（水） 曇りのち雨

A班は1号窯の西側に4m×4mのグリッド（1グリッド）を設定し、1グリッド全景写真を撮影、西側から掘り下げを開始した。その後、1号窯の割付けを進めた。B班は2号窯でBトレンチとCトレンチの間に南北4m×東西1mのトレンチを2本設定し、煙道部側の中軸杭から焚口側に11.59m地点のものをDトレンチ、15.51m地点のものをEトレンチとした。

8月16日（木） 曇りのち雨

この日は雨のため調査を中止し、午前中は可児郷土歴史館の「可児市発掘30年」展と川合考古資料館の常設展および川合古墳群の次郎兵衛塚1号墳を見学した。午後は荒川豊蔵資料館の「豊蔵の陶画」展および故荒川豊蔵氏の作業場・居宅を見学した。

8月17日（金） 晴れ

午前中は1号窯の煙道部側の中軸杭から焚口側に14m地点で杭を打ち、その杭から中軸線の左右90度に南北2mずつ杭を打ち、窯体部分に南北4m×東西14mのグリッドを設定した。東西方向では2m毎に東西7区（A～G）に分割し、割付け作業を完了した。また、1グリッドの掘り下げを引き続き進め、Eトレンチの掘り下げを開始した。午後は1号窯の調査区設定状況の写真撮影を行い、1号窯G区右の掘り下げと1グリッドの掘り下げを開始した。

8月18日（土） 晴れ

午前・午後ともに1グリッド・Eトレンチ・1号窯G区右の掘り下げを引き続き行い、A区左・C区左・E区左・G区左の南から北、南西から北東各2枚ずつ、B区右・D区右・F区右の北から南、北東から南西各2枚ずつ写真を撮った。

8月19日（日） 晴れ

午前中は1号窯G区右の掘り下げを引き続き行い、Dトレンチの掘り下げを開始した。また、1号窯の調査区・1グリッド・Dトレンチ・Eトレンチの位置を地形測量図に落とした。午後は瀬戸市広久手F窯跡に移動し、現地説明会に参加した後、窯内の埋め戻しとシート掛けを行った。

8月20日（月） 晴れ

1号窯のA区右・B区左・C区右・D区左・E区右・F区左の掘り下げを開始し、引き続きG区右の地山の検出を目指した。1グリッドでは北側に1m×4mのサブトレンチを設定し、掘り下げを進めた。また、1グリッドの西側に位置するCトレンチの南側（SX01）の掘り下げを開始した。Dトレンチで

は2号窯の左側壁の一部を検出し、Eトレンチでは引き続き地山の検出を目指し、炭層の一部を検出した。

#### 8月21日(火) 晴れ

1号窯の窯体の検出を目指し、A区右・B区左・C区右・D区左・E区右・F区左・G区右の掘り下げを引き続き行った。A区右は地山と煙道部を検出し、清掃・写真撮影・東壁の土層断面図を作成した。B区左は地山を検出、C区右は右側壁を検出し、D区左は左側壁・床面の一部を検出した。E区右は分炎柱の一部を発見し、F区左は左側壁の一部を検出、G区右では甕の口縁部・炭化物が出土した。1グリッドのサブトレンチから1号窯の前庭部を検出し、北側土層断面図を作成、写真撮影を行った。Cトレンチ南は地山を検出し、第1次調査の東側土層断面図を修正、写真撮影を行った。Dトレンチは2号窯の側壁と床面の一部、分炎柱の一部を検出、Eトレンチは引き続き地山の検出を目指した。

#### 8月22日(水) 晴れ

A区右は西・南・北壁の土層断面図を作成した。B区左・C区右・D区左・E区右・F区左は1号窯の左右側壁・床面を検出し、写真撮影・土層断面図の作成を開始した。G区右は地山直上で炭層を検出したため、清掃を行った。1グリッドはサブトレンチの東・南・北壁の土層断面図・平面図を作成した。Cトレンチでは南壁の土層断面図を作成し、Eトレンチの西側部分から北を改めて掘り進めた。Dトレンチ左右側壁・床面・分炎柱の左側面を検出した。

#### 8月23日(木) 晴れのち雨

B区左・C区右・D区左・E区右・F区左・G区右は各壁の土層断面図を完成させた。Cトレンチは地山を検出し、清掃・写真撮影を行った。Dトレンチは分炎柱を全て検出し、清掃・写真撮影、平面図・東壁の土層断面図を作成した。Eトレンチは掘削途中で終了した。最後に埋め戻しを行い、全作業を完了した。

#### 8月24日(金) 雨

9時に現場に集合し、各調査区にブルーシートをかけ、器材を積み込み、現場を出発した。11時ごろ愛知学院大学に到着、器材の片付けを終えた後、12時ごろ解散した。

(加藤 怜・下田大真)

## 第5章 検出された遺構

### 第1節 周辺地形と調査区の設定

調査範囲は西から東に向かって斜面になっており、調査範囲の標高は184.50m～193.00mである。第1次調査で標高187.00m～191.50m付近に窯が2基あることが確認できた。

第2次調査では、1号窯の正確な規模を知るため以下のように調査区を設定した。左右の側壁の中間に軸線がくるように煙道部上方と焚口下方付近に中軸杭を設置した。続いて、両中軸杭から中軸線を基準に左右に90度振り、窯体全体が入るように水平距離2mの位置に杭を設置し、中軸線の左右2mの位置に中軸線に平行する縦軸線を2本設定し、両縦軸線上に水平距離2mずつの割付けを行った。

発掘調査にあたっては、煙道部上方の中軸杭から2m地点までをA区、2m～4m地点までをB区、4m～6m地点までをC区、6m～8m地点までをD区、8m～10m地点までをE区、10m～12m地点をF区、12m～14m地点をG区とした。窯体の残存状況の確認のため、中軸線を中心にA区右からG区右まで左右交互に発掘した。

第1次調査において、Cトレンチの南側に焼土面を持つ土坑状の遺構が検出され、それをSX01とし、1号窯との関係を指摘した。1号窯とSX01との関係の調査するためにSX01の上方、1号窯の前庭部に4m×4mのグリッドを設定し、1グリッドとした。

2号窯ではBトレンチとCトレンチの間に4m×1mのトレンチを2本設定した。2号窯の範囲を確認するため、Bトレンチの下方にDトレンチ、Cトレンチの2号窯の下方にあたる地点で検出された土坑状の落ち込みの底面に広がる炭層の範囲確認のためにCトレンチの上方にEトレンチを設定した。

(下田大真)

### 第2節 1号窯の状況

A区からG区まで調査を行い、中軸線に沿った縦断面図及び2m毎の横断面図を作成した。

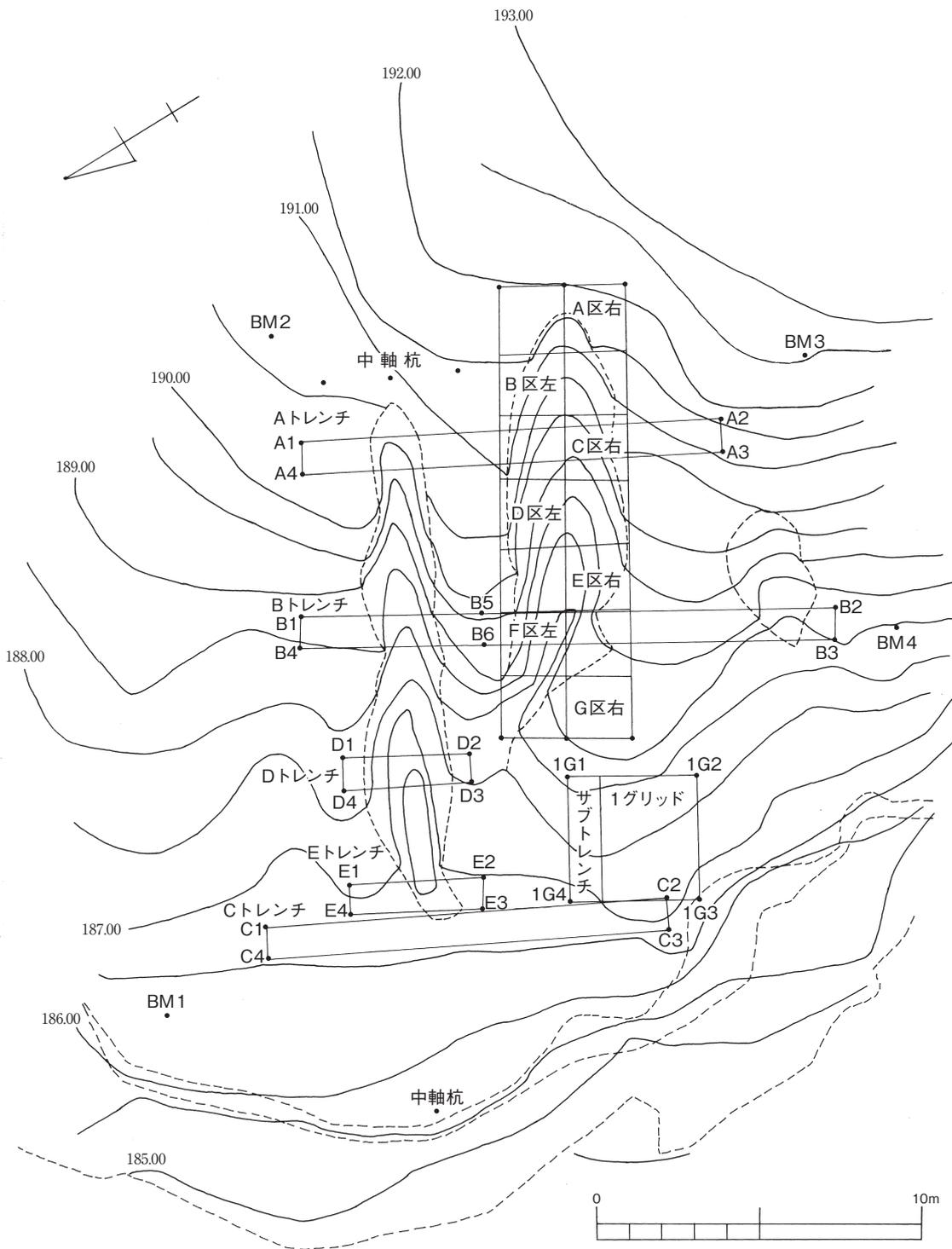
#### (1) 1号窯縦断面図

煙道部上方の中軸杭を0mとし、そこから14m地点までの実測図を作成した。1号窯は、煙道部上方の中軸杭から0.5m地点で煙道部上端を検出し、約11.3m地点が焚口付近と考えられるため、本窯の全長は約10.80mの窖窯である。燃烧室の長さは分炎柱下端まで約1.5m、焼成室の長さは約7.9mで、煙道部の長さは約0.5mである。床面傾斜は燃烧室で約5度と緩やかに上昇し、焼成室はほぼ一定で約20度、煙道部は約35度である。11.3m～14m地点にかけては窯の前庭部（F区下方からG区）がある。

分炎柱の中軸線上の長さは約50cmで、燃烧室側はほぼ垂直に立ち上がり、約36cmの高さで残存している。煙道部との境にはダンパー部とみられる奥行約20cmの平坦面が形成されている。

窯内埋土の堆積状況は、燃烧室ではいずれも昭和42年の調査の排土とみられる③粘性のある明黄褐色土層と②暗褐色土層が、③層→②層の順にそれぞれ22～36cm、6～30cmの厚さで堆積している。また、②層は14m付近まで堆積がみられるが、③層は11.3m～14m地点にかけて堆積する⑥黄白色粘土層とそれを覆う⑤にぶい黄褐色粘土層（旧表土）を9.6m付近でカットするように入り込んでいることから、⑤・⑥層は昭和42年の調査が及んでいない土層で、調査後に②・③層が流れ込んだ状況がみてとれる。

焼成室は分炎柱のすぐ上方に④被熱ブロックを多く含む暗褐色土がみられるが、これは分炎柱崩落層



第5図 古城山窯跡地形測量図



と考えられる。また、中軸杭から8.20m～8.90m地点にかけては⑦10cm以上の被熱ブロックを多く含む黄褐色土が堆積し、③が4～20cmの厚さでそれを覆っている。中軸杭から約4.2m～約5.1mは1次調査のBトレンチと交差しているが、1次調査で1号窯床面としていた部分は床面に至っていなかったことが明らかとなった。また、②層と③層はBトレンチより下方に厚く堆積するが、上方では③層の堆積はみられず②層もダンパー部にかけて全体に薄くみられるのみで、その上には①腐植土が全体を覆っている状況である。なお、中軸杭から4m～5.4m地点にかけて⑨1次床面と⑧2次床面裏の被熱面が検出されたことから、少なくとも1回は床面の改修が行われたものと考えられる。(山田美咲)

## (2) 1号窯横断面図

煙道部上方の中軸杭を0mとし、そこから焚口下方にかけて2m毎(2・4・6・8・10・12m地点)に幅4mの横断面図を6面作成した。

2m地点(Bライン)では、上層から①～⑤の計5層を確認した。窯内埋土の堆積状況は、床面直上には②層が堆積し、その直上には①層が全体を覆っている。また、窯体の左側0.7m～1.1mには攪乱が認められ、その北側では地山直上に⑤・③層が堆積している。窯体の右側には⑤層が堆積し、その中に①層が入り込んでいる。

床面の標高は190.86m前後で床面幅は0.6mでやや右上がりである。左側壁はやや膨らみをもちながら24cm立ち上がり、右側壁は16cmとわずかに立ち上がっている。

4m地点(Cライン)では、①②③③'⑤⑩⑪の計7層を確認した。南に0.9m～1.9mにかけて③層が床面直上に、1.4m～3.0mにかけてはその上層に②層が堆積し、②層内の左側壁周辺には⑪20cm大の焼土ブロック含む側壁崩落層がみられる。0.14m～0.9mにかけては地山直上に⑩黄褐色土層が堆積し、0.90mから南は③層の下に入り込んでいる。⑩層の直上に南側に流れ込むように0.14m～0.84mまで10cmの厚さで⑤層が堆積する。0.40m～0.96mにかけてはその上層に5cm～10cm大の被熱ブロック、1cm以下の焼土・白色粘土粒を含む③'明黄褐色土層が堆積した状況である。0.1m～0.84mにかけて⑤・③'層を覆うように③層がみられ、①層が4m地点の全体を部分的に覆っている。窯体の右側の3.42m～4mまで木根があり土層がみられなくなる。

床面の標高は188.6m前後で床面幅は1.66mでほぼ水平である。南に2m～2.8mに⑨1次床面と⑧2次床面裏被熱面を検出した。左側壁は外湾しながら35cm立ち上がり、右側壁は40cmやや膨らみをもちながら立ち上がっている。

6m地点(Dライン)では①②③⑤⑪⑫の計6層を確認した。窯内埋土の堆積状況は、床面直上には0.8m～2.9mに③層が堆積している。③層内1.16m～1.7mの左側壁周辺には⑫側壁崩落層が18cmの厚さで堆積し、右側壁周辺の2.56m～2.9mの地点に⑪側壁崩落層が12cmの厚さで堆積し、入り込んでいる。③層の直上の北側1m～2.3mには②層がみられ厚く堆積し、南側の2.3～2.9mには①層がみられ薄く堆積する。窯体の左側の地山直上の0.04m～0.86mまで⑤層がみられ、その上層には0m～0.76mにかけて③層がみられ、①層が③⑤層の上層に流れ込むように堆積している。

床面の標高は189.00m前後で床面幅は0.36mでやや右上がりである。左側壁は北側に広がるように1m立ち上がり、右側壁はほぼ垂直に50cm立ち上がる。

8m地点(Eライン)では①②③⑤⑫の計5層を確認した。窯内埋土の堆積状況は北側の0.04m～0.7mと南側2.8m～4mの地山直上に⑤層が堆積し、その直上の北側0m～0.34mかけて③層が、床面直上で左右から流れ込んだ状況である。③層内の0.92m～1.06mの左側壁周辺には16cmの厚さの⑫層

が入り込んでいる。窯体の右側に堆積する⑤層と床面直上の③層を覆うように1.20m～4m地点で②層がみられ薄く堆積している。①層は、8m地点の全体を部分的に覆っている。

床面の標高は188.3m前後で床面幅は1mでほぼ水平である。左側壁は外湾しながら48cm立ち上がり、南側壁は60cm程度ほぼ垂直に立ち上がる。

10m地点（Fライン）では上層から①②③③'の計4層を確認した。窯内埋土の堆積状況は分炎柱の北側の1.32m～1.62mにかけ③'層が16cmの厚さで堆積し、③'層直上と分炎柱南側の床面直上から窯体の右側0.7m～4m地点にかけて③層が覆っている。その直上1.7m～2.16mにかけて②層がわずかに堆積している。窯体の左側0.3m～0.5mにかけて木根があるため土層がみられない。木根のさらに北側の地山直上0.02m～0.70mにかけて⑤層が堆積し、その直上の0.02m～0.3mにかけて③層が堆積し、0.02m～0.40mにかけて①層が覆っている。窯体の右側は2.7m～4mにかけて①層が薄く堆積し、床面に流れ込んだ状況である。

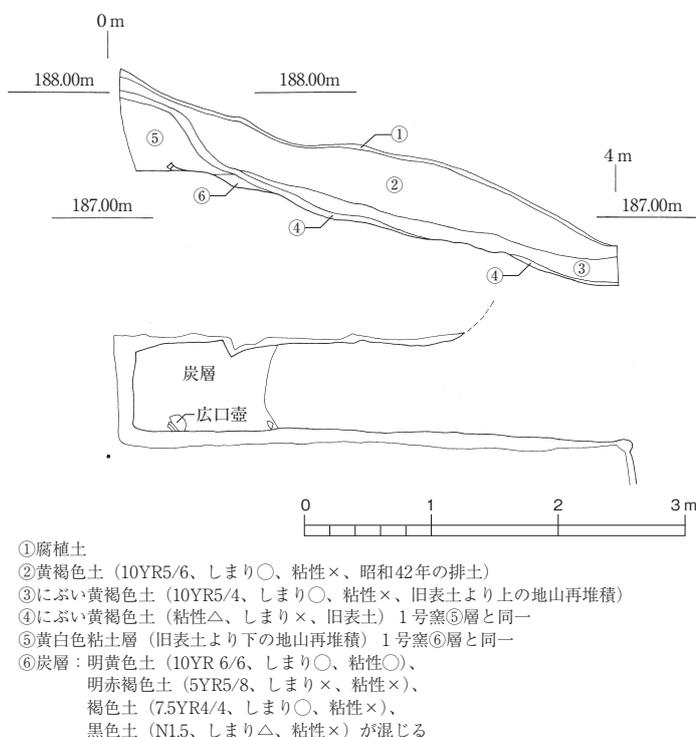
床面の標高は187.6m前後で床面幅は1.2mでやや右上がりである。左側壁は外反しながら1.2m立ち上がり、右側壁は54cm程度ほぼ垂直に立ち上がっている。10m地点では高さが30cm、最大横幅30cmの分炎柱が窯体の左側に確認できた。

12m地点（Gライン）では上層から①②③⑤⑥⑬の計6層を確認した。土層の堆積状況は、床面直上には1.28m～2.88mにかけて⑥層が60cm程度の厚さで堆積する。窯体の左側の地山直上の0m～0.48mにかけ⑬明褐色土層が堆積している。その直上の0m～0.4mにかけて⑤層が⑬層を覆うように堆積し、窯体の右側では地山直上の3.5m～4mにかけて⑤層が堆積、1.1～2.3mにかけて⑤層が流れ込むように薄く堆積している。0.6m～4mにかけては②層が⑤⑥層が覆うように広がっている。窯体の左側の⑤層直上0m～0.4mにかけて③層が堆積し、窯体の右側には②層の直上1.3m～4mにかけ①層が薄く堆積している状況である。G区の地山直上には全面に炭層が広がっていた。（万年美紀）

### 第3節 1グリッドの状況

1グリッドでは、腐植土を掘削した段階で地山とみられる黄褐色土が全面に検出されたが、念のため北側に幅1mのサブトレンチを設定し掘り下げたところ、さらに下層から1号窯の前庭部とみられる平坦面と地山を検出した。1グリッドの実測図は北側の土層断面図と平面図を提示した。

土層は、①～⑥の6層を確認した。東側の杭を0mとすると、そこから西に84cmの地点では地山直上に1号窯の⑥層と同じ⑤黄白色粘土層が東端で82cmの厚さで堆積するが、西に50cmの地点から急激に落ち込み、1mの地点でみられなくなる。また、西に84cmの地点で地山がやや落ち込み、そこから1.30mの地点にかけて⑤層と



第7図 1グリッドサブトレンチ遺構実測図

地山の隙間に⑥炭層が入り込んでいる。なお、西に約50cmの地点では地山直上から広口壺の破片が出土している。さらに、⑤・⑥層の上面には、これらに沿うように最大8cmの厚さで1号窯の⑤層と同じ④層（旧表土）が全体を覆っている。④層は⑤層と同じく西に50cm付近の地点から落ち込み、1mの地点からは地山と同じような傾斜で2.54mの地点まで確認されたのち、3.16mから4.02mの地点にかけて最大4cmの厚さで堆積している。西に1.04mの地点から西側では、③にぶい黄褐色土層が最大20cmの厚さで④層を覆っている。また、東側では④層、西側では③層を覆うように調査区全体の③層（昭和42年の排土）が最大44cmの厚さで堆積し、それを①層が薄く覆っている。なお、⑤層は旧表土以前の地山再堆積、③層は旧表土以後の地山再堆積層である。

また、平面図をみると、東側の1.34m地点にかけて平坦面が形成され、これより西側は緩やかな斜面となっていること、平坦面直上に炭層（⑥層）が検出されたことなどを加味すると、この平坦面は1号窯の前庭部であると考えられる。（子安優翼）

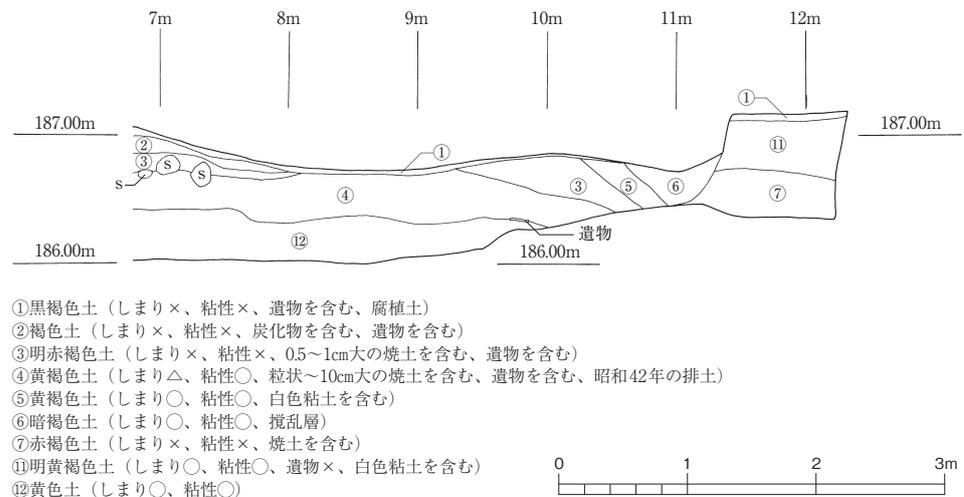
#### 第4節 各トレンチの状況

第2次調査では、2号窯のBトレンチとCトレンチの間に4m×1mのトレンチを新たに2本設定した。BトレンチとCトレンチの中間に設定したものをDトレンチ、Cトレンチの東側に沿って設定したものをEトレンチとする。Dトレンチは2号窯の窯体及び窯内埋土の状況確認を目的としている。また、EトレンチはCトレンチで検出された土杭上の落ち込みの底面で確認された炭層の範囲確認を目的としている。Dトレンチは土層断面図と平面図を作成した。Eトレンチは掘削途中で調査期間が終了し土層断面図を作成するに至らなかったため、遺構の検出状況を報告するに留める。また、1グリッドの調査の結果、Cトレンチで地山としていた面より低い位置で確実な地山面が検出された。そのため、Cトレンチでの南半を深掘りしていたところ、地山を検出することができたため、土層の堆積状況について第1次調査報告分の修正・補足を行う。

##### (1) Cトレンチの状況（第8図）

第1調査の結果、Cトレンチでは1号窯の下方にあたる南側で被熱面及び焼土層をもつ土坑を検出し、1号窯と関連する遺構であると推定し、SX01とした。また、2号窯の下方にあたる中央付近では東端に土坑状の落ち込みを検出し、その底面全体に炭層が確認されたことから2号窯の焚口ないし燃焼室に関連するものであると報告した。

本調査の1グリッドにおいて、Cトレンチの地山より低いレベルに確実に地山が検出されたことから、Cトレンチは第1次調査の際の地山まで検出できていなかったことが判明した。そのため、杭C



第8図 Cトレンチ南端遺構実測図

1を0mとして7.20mの地点より南側を掘り下げたところ、全面に地山を検出し、覆土を除去した結果SX01は遺構ではないことが明らかとなった。ここでは地山を検出した7.20m地点より南側の土層について改めて報告する。なお、土層番号と内容については第1次調査の報告に準拠し、第2次調査で新たに検出した⑪層については第1次調査の番号に連続するものである。

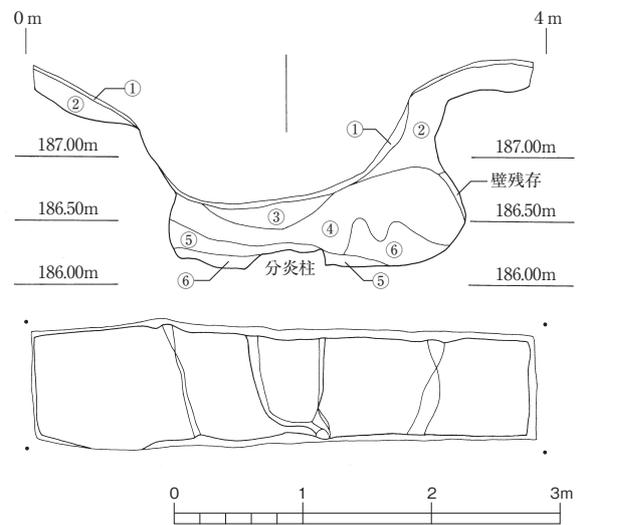
土層は①～⑧⑪⑫の10層が確認された。地山直上には南に10m地点までの⑫黄色土層が最大40cmの厚さで堆積し、10.55mの地点にかけてはその上に④黄褐色土層が堆積している。なお、9.80m付近の⑫層と④層の境で遺物が出土している。8.10m付近にかけては④層の直上に③明赤褐色土層、②褐色土層が15cmの厚さで堆積し、④層と③層の境には10～20cm大の円礫がみられる。9.30m～10.74mの地点には④層を覆うように30cm程度の厚さで③層が堆積し、10.25m～10.94mの地点には③層を覆うように20cmの厚さで堆積している。また今回掘り下げた11.40m～12.32mの地点では地山直上に⑦赤褐色土層が30cm～38cm程度の厚さで堆積し、その上に⑪層が36cm～50cmの厚さで堆積し、①腐植土層が調査区全体を薄く覆っている。  
(福田治也)

## (2) Dトレンチの状況 (第9図)

Dトレンチでは、2号窯の分炎柱の一部及び床面を検出したほか、天井崩落層なども確認されたことから、窯内埋土がほぼ手つかずの状態であることが判明した。実測図は東側の土層断面図と平面図を作成した。杭D1の標高は187.9m、杭D2の標高は187.76mで、杭D1を0mとする。

土層断面図は東壁の1面を作成し、①～⑥の6層が確認された。南に1.16m～1.80mにかけての床面直上には⑥天井崩落層が6cm～10cm前後の厚さで堆積し、1.10m～2.8mの地点にかけてその直上を⑤炭層が最大20cmの厚さで覆っている。また、2.44m～3.26mの地点では⑤層及び床面直上に⑥層が最大34cmの厚さで堆積する。その後、窯内全体を④黄褐色土層が10～52cmの厚さで覆い、1.36m～2.37cmの地点には昭和42年の排土とみられる②黄褐色土層が最大20cmの厚さで堆積している。また、2.50mより南側には④層及び地山の上に②層が厚く堆積しているほか、0.86mより北側の地山直上にも②層がみられ、最上層の①腐植土層が全体を覆っている。なお、④～⑥層が2号窯の窯内埋土と考えられる。

2号窯の床面の標高は186.10m～186.27mで、ほぼ水平であるが側壁に近づくにつれやや高くなっている。左側壁・右側壁とも外湾しながら立ち上がり、左側壁は50cmの高さまで、右側壁は60cmの高さまで良好に残存している。分炎柱は南に1.68mから2.30mの地点に築かれ、幅62cm、残存高14cmである。床面幅はトレンチ東端で1.97m、西端で1.6mである。分炎柱は基部の幅が60cm以上、長さが70cm以上で方形を呈している。  
(坂井 航)



- ①腐植土
- ②黄褐色土 (しまり△、粘性○、粒状～10cm大の焼土を含む、昭和42年の排土)
- ③窯内埋土 (2.5YR 暗褐3/6、しまり○、粘性○)
- ④窯内埋土 (10YR 黄褐5/6、しまり○、粘性○、1～7cm程度の焼土混じる)
- ⑤炭層 (5YR1.7/1、しまり△、粘性○)
- ⑥明黄褐色土 (10YR7/6、しまり○、粘性×) 天井崩落層  
明赤褐色土 (2.5YR5/8、しまり×、粘性×) が混じる

第9図 Dトレンチ遺構実測図

## 第6章 出土遺物の概要

第2次調査では甕・広口壺・片口鉢・小形壺類・東濃産の碗・焼台が出土した。なお、本窯跡出土の甕類の基本調整として、頸部から口縁部にかけての内外面には回転ナデ調整、胴部内面上方には横方向ナデ調整が認められる。

### 第1節 大形壺甕類

#### (1) 広口壺 (1・9)

1は口径20.4cm、縁帯幅1.2cmである。頸部はほぼ直立し、上方で外側に強く屈曲する。口縁部上端は丸く収められ、内面の口縁直下には窪みが一周する<sup>(註)</sup>。胴部上方は紐輪積み痕が明瞭に残っている。外面全体と頸部内面にはボロが大量に付着しているため調整は不明である。胎土は灰白色でやや粗くゆがみも大きい。(山田美咲)

9は底部で底径15.0cm、残存高8.4cmである。胴部外面下端には横ナデ調整後、縦方向の不規則なヘラ搔き上げ痕調整が行われ、その上に指圧痕が認められる。胴部内面は横ナデ調整が行われている。底部内面には指圧痕が確認され、ボロが付着し、全体に自然釉が掛かっている。底部外面には砂粒痕が付着している。器表は外面が茶褐色、内面は淡緑色を呈している。焼成は良好であり、胎土は緻密な灰白色で、1mm以下の多量の黒斑、少量の礫を含み、少量の1～2mm程の長石粒の噴き出しが確認できる。(下田大真)

#### (2) 甕 (2～7)

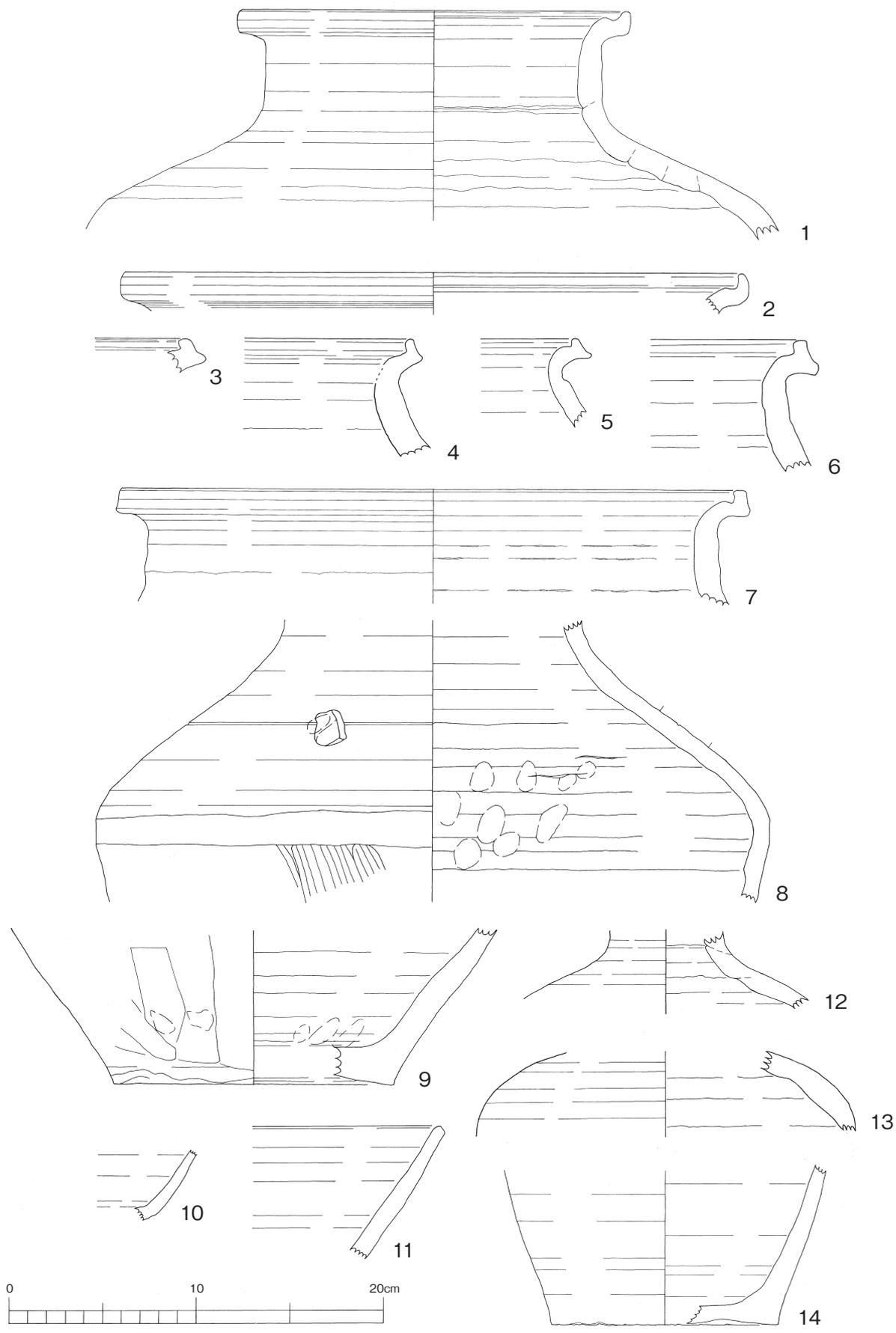
口縁部の形状からA類・B類に大別した。A類は所謂L字状口縁、B類は所謂T字状口縁で、口縁部下端が短く摘み出されている。A類は口縁上端部の形状からさらに1・2類に細分される。

A1類(7)は、口縁部上方が丸みを帯びる形状である。口径33.2cm、縁帯幅1.4～1.6cmで、頸部はほぼ垂直に立ち上がり上方で外反する。口縁部はやや内傾し、上方に短く伸び、上端は丸く収められる。頸部は横方向にナデ調整される。胎土は淡黄白色で1～2mm台の黒斑と砂粒を多く含んでいる。焼成不足である。

A2類(2・4)は口縁部上端が方形で短く上方へ伸びる形状である。縁帯幅1.2～1.3cmで口縁部はやや内傾している。2は内面の口縁直下に窪みが一周する。口縁部内面・外面に淡い緑の自然釉が掛かり、ボロが付着している。破断面は赤褐色である。4は頸部下方が内外面とも横方向のナデ調整がみられ、頸部内面上方是一部剥離により欠損している。器表面、破断面とも黄白色で胎土はやや粗く、1mm以下の黒斑、3mm大の小石を含んでいる。焼成不足である。

B類(3・5・6)は縁帯幅1.2～2cm。口縁部上方は内傾し、丸く収められるもの(3・5)と、方形を呈するもの(6)がある。3は胎土が器表面、破断面とも黄白色で2mm大の黒斑と1mm以下の砂粒を含み、焼成不足である。5の頸部は内傾し、上部で外側に屈曲する。内面の口縁直下には窪みが一周し、さらに口縁部は工具でカドをつけている。胎土は器表面、破断面とも灰色で1mm以下の白色砂粒、黒斑が含まれる。6の頸部はやや内傾し頸部上方で外側に屈曲している。頸部下方は内外面とも横方向ナデ調整が行われる。器表面は黄白色である。胎土は器表面と同じく黄白色でやや粗く、3mm以下の黒斑・砂粒を含み、やや焼成不足である。

なお、A類・B類の分類は口縁部の形状からA1類(2・4)が甕A1類、A2類(7)が甕A2類、



第10図 古城山窯跡出土遺物実測図(1)

B類（3・5・6）が、甕B2類に比定される（山本2013）。

（山田美咲）

### （3）耳付甕（8）

8は耳付甕の胴部片で、最大胴径36.0cm、残存高15cmである。胴部外面は自然釉が薄く掛かり調整がやや不明瞭であるが、肩部までロクロ目が確認でき、肩部から下方には3cm幅のヘラ掻き上げ痕を確認できる。また、胴部上面には沈線が施され、その上に板状の耳が付けられる。耳の付け根には指圧痕が確認できた。胴部内面は上方がロクロ目、その下方は横方向のナデ調整が施され、複数の指圧痕が確認できる。さらに下方は、より強く横方向のナデ調整が施されている。器表は小豆色を呈し、2mm以下の多量の黒斑、5cm以下の少量の白色砂粒を含み、2mm大の長石粒の噴き出しがみられ、やや密の灰白色の胎土を使用している。

（下田大真）

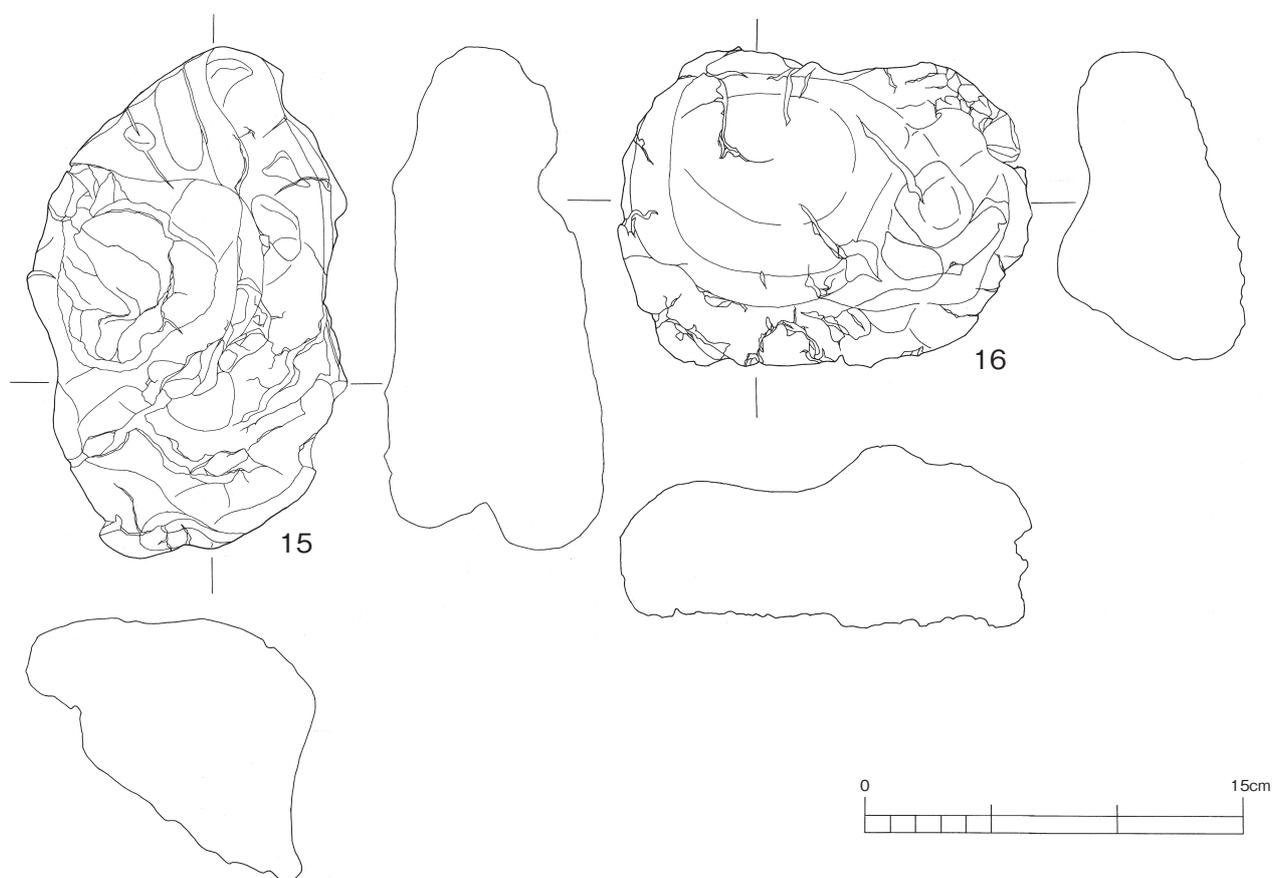
## 第2節 片口鉢他

### （1）片口鉢（11）

10は残存高7cmの片口鉢で、焼成不足のため調整は不明瞭である。口縁部は直線的に開き、断面は隅丸方形を呈している。体部は外面・内面ともロクロ目がみられ、口縁部はナデ調整が行われる。器表は黄白色を呈し、1mm以下の黒斑、多くの2mm前後の砂粒を含む同色の胎土を使用している。

### （2）小形壺類（12・13）

12は壺の肩部で残存高4.2cmである。外面上方には回転ナデ調整が、その下方には横方向のナデ調整が施されている。内面には横方向のナデ調整が施され、輪積み痕が明瞭にみられる。器表は自然釉が剥落し、白っぽくなっており、0.5mm～3mm大の白色粒を多く含む灰褐色・茶褐色のやや密な胎土を使



第11図 古城山窯跡出土遺物実測図（2）

用している。1 グリッドから出土しており、同じ1 グリッドから類似品が出土している。

13は壺の胴部上方の内側に湾曲する部分で最大胴径20.2cm、残存高4.4cmである。外面・内面ともに横方向のナデ調整が施されている。器表には自然釉が掛かり、濃緑色で光沢がある。胎土には密な灰白色を使用し、0.5mm大の砂粒を含み、2mm大の長石粒の噴き出しがみられる。

14は壺の底部で底径12.0cm、残存高8.7cmである。胴部外面は自然釉が掛かっているため、調整が不明瞭である。内面は胴部から底部にかけて、ロクロ調整が行われると考えられるが、表面にハゼたようにもみえる細かい凹凸がある。底部内面には自然釉が掛かり、ボロが付着している。底部外面にも外側にボロが付着し、全体に砂粒痕が付着している。器表は自然釉が掛かった灰色・黒色・濃緑色を呈し、多くの1mm以下の黒斑、少量の2mm以下の砂粒を含んだ灰色でやや密な胎土を使用している。

### (3) その他 (10)

10は東濃窯産の碗と思われる体部片で残存高3.8cmである。体部外面はロクロ目がみられ、下端には強いナデ調整がみられることから、高台が付けられていると思われる。体部内面にはコテナデ痕がみられる。器表は黄灰色を呈し、1mm以下の黒斑を含む同色の緻密な胎土を使用している。

### (4) 焼台 (15・16)

15は粘土を二つに折り曲げて成形された焼台で長径20.15cm、短径11.7cm、厚さ8.0cmである。床面側は床面の傾斜に合わせたようになっている。上面には指圧痕や指ナデ痕が確認でき、灰白色で2cm大の小石も確認できる。器表は茶褐色・暗褐色、床面側が黄白色を呈しており、2～3cm大の礫を少量、1cm以下の砂粒を多く含む黄白色・明褐色の胎土を使用している。

16は粘土塊を使用した焼台で長径16.8cm、短径12.8cm、厚さ7.0cmである。上面には製品が置かれた痕を確認できる。器表は上面が小豆色・暗褐色、裏面が薄茶色・赤褐色を呈しており、3cm以下の礫を多量に含む粗い薄茶色の胎土を使用している。

(下田大真)

(註) 口縁部の形状から広口壺A類に比定される (山本2013)。

表1 古城山窯跡出土遺物計測表

図	器種	分類	法量			注記番号	口縁残存率%	縁帯幅	備考
			器高	口径	底径				
1	広口壺		—	20.4	—	KJ2 CTC No.28	25	1.3	
2	甕	A 2類	—	33	—	KJ2 1G No.10	5	1.3	自然釉
3	甕	B類	—	—	—	KJ2 CTS No.30	5	1.5	
4	甕	A 2類	—	—	—	KJ2 G右 No.27	5	1.2	
5	甕	B類	—	—	—	KJ2 1G No.10	5	1.2	
6	甕	B類	—	—	—	KJ2 CTN No.31	5	2	
7	甕	A 1類	—	33.2	—	KJ2 G右 No.29	20	1.4~1.6	
8	耳付甕		—	—	—	KJ2 CTC No.28	—	—	自然釉
9	広口壺		—	—	15	KJ2 CTC No.20	—	—	
10	碗類		—	—	—	KJ2 1G No.3	—	—	
11	片口鉢		—	—	—	KJ2 1G	—	—	
12	壺		—	—	—	KJ2 1G No.5	—	—	
13	壺		—	—	—	KJ2 1G No.13	—	—	
14	壺		—	—	—	KJ2 CTC No.28	—	—	
15	焼台		—	—	—	KJ2 B左 No.25	—	—	
16	焼台		—	—	—	KJ2 D左	—	—	

表2 古城山窯跡出土遺物台帳

No.	日付	調査区	出土層位	基本土層	注記番号	備考
1	180814	Cトレンチ東側	表採	—	KJ2 No.1	
2	180817	1グリッド	赤褐色土	②黄褐色土	KJ21G No.2	
3	180817	1グリッド	暗褐色土	④にぶい黄褐色土	KJ21G No.3	
4	180817	Eトレンチ	明褐色土	—	KJ2ET No.4	
5	180818	1グリッド	暗褐色土	④にぶい黄褐色土	KJ21G No.5	
6	180818	Eトレンチ	暗褐色土	—	KJ2ET No.6	
7	180818		2017年排土	—	KJ2 No.7	Cトレンチを埋めた土囊の中
8	180818	1号窯G区右	暗褐色土	②暗褐色土	KJ2G区右 No.8	焼土ブロック・構築材含む
9	180818	1グリッド	黒褐色土	④にぶい黄褐色土	KJ21G No.9	焼土ブロック・炭化物含む
10	180818	1グリッド	赤褐色土	②黄褐色土	KJ21G No.10	
11	180818	1グリッド	暗褐色土	④にぶい黄褐色土	KJ21G No.11	焼土ブロック・炭化物含む
12	180819	Dトレンチ	表採	表採	KJ2DT No.12	
13	180820	1グリッド	赤褐色土	②黄褐色土	KJ21G No.13	炭化物を含む
14	180820	Eトレンチ	黒褐色土	—	KJ2ET No.14	
15	180820	Eトレンチ	明褐色土	—	KJ2ET No.15	
16	180820	1グリッド	表採	表採	KJ21G No.16	
17	180821	1グリッド	赤褐色土粘土層	⑥炭層	KJ21G No.17	
18	180821	Dトレンチ	黒褐色土	①黒褐色土か	KJ2DT No.18	
19	180821	Eトレンチ	黒褐色土	—	KJ2ET No.19	
20	180821	Cトレンチ南	赤褐色土最下層	⑦赤褐色土	KJ2CTS No.20	
21	180821	Dトレンチ	明褐色土	⑥明赤褐色土が混じる明黄褐色土	KJ2DT No.21	
22	180821	1号窯F区左	炭層直上	③'明黄褐色土	KJ2F区左 No.22	
23	180821	林の中	表採	表採	KJ2 No.23	古城山窯跡入口
24	180821	Eトレンチ	黄褐色土	—	KJ2ET No.24	
25	180821	1号窯E区右	焼土混じりの淡褐色土	③明黄褐色土	KJ2E区右 No.25	
26	180821	1号窯D区左	床面直上	③明黄褐色土	KJ2D区左 No.26	
27	180821	1号窯G区右	黄白色粘土層最下層	⑥黄白色粘土層	KJ2G区右 No.27	
28	180822	Cトレンチ中央	黄褐色土	—	KJ2CTC No.28	
29	180822	1号窯G区右	黄白色粘土層	⑥黄白色粘土層	KJ2G区右 No.29	
30	180822	Cトレンチ中央	黄褐色土	—	KJ2CTC No.30	近代遺物
31	180822	Cトレンチ北	黄褐色土	—	KJ2CTN No.31	
32	180822	1グリッド	炭層直上	⑤黄白色粘土層	KJ21G No.32	
33	180823	Cトレンチ中央	黄褐色土	—	KJ2CTC No.33	
34	180823	Cトレンチ北	黄褐色土地山直上	—	KJ2CTN No.34	
35	180823	1グリッド付近	表採	表採	KJ21G No.35	土囊の中
36	180821	Eトレンチ	黄褐色	—	KJ2ET No.36	近代遺物

## 第7章 小結

古城山窯跡第1次調査では、A・Bトレンチで1・2号窯の床面及び側壁の一部を検出した。両窯とも窯内埋土の堆積が薄いこと、両窯の間には昭和42年の調査時の排土が厚く堆積していることから、これらは調査が行われた後埋め戻さずに放置されたものと報告した。また、Cトレンチでは1号窯の下方にあたる南側部分でSX01を、2号窯の下方にあたる中央部分東端で底面に炭層をもつ土坑状の落ち込みを検出したが、いずれも性格は不明であったためそれぞれ1号窯と2号窯との関連を指摘するに留めた（愛知学院大学2019）。

第2次調査では、1号窯窯内の発掘調査を実施し土層断面図を作成した。その結果、1号窯は予測通り煙道部から焼成室上方の土層堆積は薄いですが、第1次調査のAトレンチより下方には昭和42年の排土が流入している状況が明らかとなった。また、6m地点や8m地点では側壁の崩落層、分炎柱の上方では分炎柱の崩落層が確認され、過去の調査後に埋め戻されず放置されたことで窯体が風化した様子を表している。窯体の規模は、全長10.80mで、8m地点で最大幅1.96mとなり、焼成室の床面傾斜は20°である。竹内氏の報告では、1号窯は全長10m余、最大幅2.08m、床面傾斜23°とあり、今回の調査ではほぼ同等の数値を得ることができた。また、C区内で床面が二枚確認され、少なくとも1回は床面を貼り替えていることが明らかとなった。

また、1号窯のG区右及び1グリッド内サブトレンチでは1号窯の前庭部床面が検出され、この直上に黄白色粘土層が厚く堆積しそれを旧表土が覆っていたことから、この黄白色粘土層は1号窯の廃絶後に堆積したものと判断される。なお、Cトレンチ南側で検出され1号窯との関連を指摘したSX01については、1グリッドの調査の結果土坑底部の焼土面は、地山直上に堆積した焼土を多く含む昭和42年の排土であり、土坑ではないと判断した。

Dトレンチでは2号窯の床面・両側壁・分炎柱を検出した。第1次調査では2号窯も昭和42年に調査しその後放置されたものと報告したが、Dトレンチの調査の結果窯内には天井・窯壁崩落層などを含む埋土が厚く堆積しており、その直上に昭和42年の排土が部分的に認められ、この状況をみると、過去の発掘調査では2号窯までほとんど手が及んでいなかったようである。また、Dトレンチにおける床面幅は最大で1.97mであることから、2号窯の床面最大幅は少なくともこれより広く、1号窯より規模の大きい窯であることが推測される。

Cトレンチ中央付近の東端で検出された底面に炭層がみられる土坑状の落ち込みについては、Eトレンチを設定し調査を行った結果、これが2号窯に向かって溝状に伸び、その床面全面に炭層が広がっていることが判明した。Dトレンチ内に分炎柱があることを考えると、Eトレンチまで燃焼室が続いているとは考えにくく、今後両トレンチ間の状況を明らかにする必要がある。

出土遺物については出土点数が非常に少なく、壺甕類が大半で片口鉢が少量認められる点は第1次調査と同様であるが、今回は壺類及び耳付甕も出土した。甕類はA1類・A2類・B類がみられ、A類が常滑編年の第4型式期、B類が第5型式期に併行する（山本2013）。壺類・耳付甕は、甕類の状況から常滑編年の第4・5型式併行期に比定できよう。なお、耳付甕は、常滑窯の込水C2号窯や南蛇ヶ谷1号窯、槍場・御林B5号窯、鈴ヶ谷1号窯などで類例がみられる<sup>(註)</sup>（中野2013）。（山本智子）

(註) 常滑窯ではこれらは広口壺に分類されるが、ここでは明確な頸部をもつものを広口壺、それ以外を甕と認識し、本窯跡出土の耳付甕は胴部上方部分の破片で甕と同じ形状であると考えられる。

# 付編 牟田洞窯跡第2次調査2 グリッド出土の現代遺物について

## はじめに

愛知学院大学文学部歴史学科歴史考古学専攻では、平成25・26年度に岐阜県可児市久々利柿下入会に所在する牟田洞窯跡の発掘調査を実施した。平成26年度の第2次調査では、牟田洞2・3号窯に近接する尾根上の平坦面に南北2.5m、東西7.35mの調査区（2グリッド）を設定し、そこから出土した牟田洞窯で焼成された大窯製品については、既に平成27年度に報告した（愛知学院大学2016）。しかし、2グリッドは故荒川豊蔵氏の窯および作業場の北側に位置することから、実は出土遺物の多くは豊蔵氏が製作した現代遺物であり、その整理と報告には平成28年度以降も継続せざると得なかった。そして、平成30年度にはようやく洗浄と注記が終了し、令和元年度には分類・接合を開始するとともに、実測にも一部着手した。今回、その成果を報告する。（藤澤良祐）

## 1. 茶碗類

茶碗類には天目茶碗・丸碗・筒形碗がある。

### (1) 天目茶碗 (1)

高台周辺を除き長石釉が施された「白天目」である。器高8.2cm、口径13.6cm、高台径5.4cmで、高台は内部が浅く削り込まれ、外側はほぼ直立し、高台脇には段が形成される。体部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はほぼ直立し端部は僅かに外反する。体部上方から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部周辺は回転ナデ調整される。胎土はやや粗く淡黄白色を呈する（以下、「白土系」と呼ぶ）。釉薬は長石釉で、やや焼成不足で釉薬が溶けきっていないため、光沢がなく不透明な白色を呈する。体部下端の露胎部分には長方形の「斗」が横向きに押印されている。体部内面には輪ドチの痕跡が残る。

（山田美咲・荻野貴史）

### (2) 丸碗 (2・3)

2は器高8.1cm、口径12.6cm、高台径5.8cmである。高台は外側がほぼ直立、内側が外傾した削り出し高台で、体部下方の丸みは強く上方はほぼ直線的に立ち上がる。底部内面は浅く凹み「茶溜り」が形成される。体部下方から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整、高台端部は回転ナデ調整される。体部外面上方および内面にはロクロ目が残り、口縁部周辺は回転ナデ調整が加えられる。胎土はやや密で、鉄分が多いよう茶色を呈する（以下、「赤土系」と呼ぶ）。高台周辺を除き全面に灰釉系の釉薬が漬け掛けられるが、光沢があり半透明で深緑色の発色である。なお底部内面には輪ドチが付着しており、小碗類などの重ね焼きが行われたものと思われる。（杉村有亮）

3は器高8.4cm、口径11.2cm、高台径5.0cmである。高台は外側上方がほぼ直立、下方が内傾し、内側が外傾する削り出し高台である。体部下方はやや丸みを持って開き、上方はほぼ直立し、底部内面には「茶溜り」が形成される。高台周辺は回転ヘラ削り調整され、ささくれ立つが、他の部分は釉が厚く調整方法は不明である。胎土は赤土系で茶褐色を呈し、高台周辺を除き長石釉が漬け掛けられ、光沢があるが不透明で灰色の発色である。底部内面には輪ドチの痕跡が残されている。（水野啓吾）

### (3) 筒形碗 (4)

器高7.6cm、口径12cm、高台径3.2cmである。底部は扁平で、底部の中央には低い幅広の高台が削り出される。体部から口縁部にかけて僅かに内傾し、口縁部周辺はやや肥厚している。底部内面には「茶

溜り」が形成される。底部外面はフリーハンドによるヘラ削り調整、体部外面はヘラ搔き上げ調整される。口縁部は回転ナデ調整され、体部内面から底部内面にかけてロクロ目が認められる。3種類の胎土が使用されている。赤土系が主体で、その上に黒褐色（以下、「黒土系」と呼ぶ）があり、さらに白土系を貼り付けている。黒土系の割合は少なく、3種類ともは1～2mmの黒斑や白色砂粒を含んでいる。高台周辺を除き長石釉が漬け掛けされ、赤色系と黒色系では灰色、白色系では白色に近い発色である。底部の露胎部にはヘラ書きによる「斗」があり、底部と体部の境には、施釉時についたと思われる指痕が3方にみられる。

（山田美咲）

## 2. 小碗類

小碗類には小天目・小碗・六角杯などがある。

### （1）小天目（5）

器高4.3cm、口径7.2cm、高台径3.4cmの小形の天目茶碗である。高台の断面形は外側が直立、内側が外傾した削り出し高台で、高台脇には段が形成される。体部は僅かに丸みを持って立ち上がり、上方はほぼ直立し、口縁端部は僅かに外反している。体部上方から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整、口縁部は回転ナデ調整される。胎土はやや粗めの白土系で、高台周辺を除き長石釉が施される。体部を親指・人差し指・中指・薬指で挟んで漬け掛けされる。若干焼成不足のため、やや光沢があり半透明で薄桃色の発色である。底部には錆釉で「斗」と書かれている。

（森本帆乃夏）

### （2）小碗（6～8）

6は器高4.4cm、口径7.1cm、高台径3.5cmの端反り形の碗である。高台は外側が直立し、内側が外傾した削り出し高台である。体部下方は丸みを帯び上方は直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。体部下方から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整され、体部中央にはロクロ目が残り、口縁内外面には回転ナデ調整が施される。胎土は淡いオレンジ色の発色であるが白土系と思われる。全面に長石釉が施され、光沢のない不透明な白色を呈する。体部中央には漬け掛けの際の指痕が4方に認められる。なお底部内面には輪ドチの痕跡が残る。

（兵頭美江）

7は器高3.8cm、口径6.8cm、高台径2.9cmの端反り形の碗である。高台は外側が若干内傾し、内側が外傾した削り出し高台で、高台脇には小さい段が形成される。体部は全体にやや丸みを持って開き、口縁端部は僅かに外反する。体部下端から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整されるが、他の部分は釉が厚く不明である。胎土は白土系で、高台周辺を除き長石釉が漬け掛けされる。やや焼成不足のため、光沢はなく不透明で黄白色を呈する。

（荻野貴史）

8は器高4.0cm、口径5.2cm、高台径3.7cmの半筒形の杯である。高台は外側が内傾、内側がほぼ直立した低い削り出し高台を有する。体部下端の丸みは強く上方はほぼ直立し、口縁端部は外反する。体部下方から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整され、体部外面中央および体部外面から底部内面にかけてロクロ目が残り、口縁内外面には回転ナデ調整が施される。胎土は赤土系で、全面に錆釉を施した後、全面に長石釉を漬け掛けしており、光沢があり不透明で灰色の発色である。体部外面には漬け掛けの際の指痕が残る。

（加藤悠華）

### （3）六角杯（9）

六角杯は、器高5.0cm、口径6.0～6.9cm、高台径3.8cmである。高台は外側がほぼ直立、内側が外傾した削り出し高台で、体部下端に稜が入り上方は直立する。ロクロ成形後、体部の6方を叩いて六角形

に仕上げている。体部下端から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整、口縁内外面は回転ナデ調整され、体部内外面にロクロ目が僅かに残る。胎土は白土系で、高台周辺を除き鉄釉が漬け掛けされ、光沢のない不透明で黒色を呈する。「瀬戸黒」風の発色である。体部下端に露胎部には「斗」のヘラ書きがある。やや薄茶色の密な胎土が使用されている。(栗山美里)

### 3. 皿類

#### (1) 黄瀬戸中皿 (10)

器高2.8cm、口径16.5cm、高台径8.5cmである。断面が逆台形の付高台で、体部は直線的に持ち上がり、口縁部は丸みを持つ。底部外面から体部下端にかけて回転ヘラ削り調整され、口縁部は回転ナデ仕上げされる。底部内面には施釉により不明瞭であるが、花文がヘラ状工具により描かれている。胎土は白土系で、全面に灰釉系の釉薬が浸し掛けられ、光沢はあるが不透明なマット状で緑白色を呈する。文様部分には緑釉や鉄釉が落とされており、底部外面中央には、天目茶碗と同様な「斗」の長方形の印が押されている。底部内部には輪ドチと団子トチが3個、高台部分には輪ドチが溶着しており、体部内外面には浸し掛けの際の指痕が2方に認められる。(寺井崇浩)

#### (2) 土器皿 (11)

器高3.15cm、口径12.2cm、底部5.2cmである。平底で、体部は直線的に開き、口縁端部は丸く収まる。器壁は全体に厚く、底部外面には右回転の糸切り痕が残り、体部外面から底部内面にかけてロクロ目が顕著で、口縁内外面は回転ナデ調整される。回転ヘラ削り調整痕は全く認められない。無釉で、胎土は赤土系である。底部外面中央には「斗」とヘラ書きされている。(洲崎拓真)

### 4. 向付類

向付類には織部製品と黄瀬戸製品がある。

#### (1) 織部向付 (12)

器高8.6cm、口径9.6cm、高台径5.4cmの半筒形向付である。底部は扁平で、底部の中央には低い高台が削り出される。高台内が浅く削り込まれ、断面形は外側が内傾、内側が僅かに外傾する。体部はほぼ直立するが上方で一旦括れ、口縁部はやや内傾する。体部中央から底部外面にかけて回転ヘラ削り調整され、上方には4～5条の沈線が施される。胎土は緻密ではあるが赤土系で、露胎となる高台周辺を除き長石釉が、体部上方外面には緑釉が刷毛塗りされる。長石釉部分は灰色、緑釉部分は深緑色の発色で、いずれも半透明で光沢がある。施釉後、体部の2方には白釉と錆釉による文様(蕨と山)が描かれている。底部外面の露胎部には「斗」のヘラ書きが認められる。(大平悠希)

#### (2) 黄瀬戸向付 (13)

器高9.1cm、口径11.2cm、高台径5.9cmの半筒形向付である。高台は断面が逆台形を呈し、体部下端の丸味が強く、上方が直立し口縁部はほとんど外反しない。器壁は全体に薄く、体部のほぼ中央には突帯が削り出される。体部下方から底部外面、および突帯部分周辺は回転ヘラ削り調整され、口縁部は回転ナデで仕上げられ、体部内面にロクロ目、底部内面にはコテが当てられている。体部外面上方の2カ所にヘラ状工具により花文と唐草文、底部内面中央には花文が描かれている。胎土は白土系で、灰釉が全面に漬け掛けされたと思われるが、焼成不足のため光沢がなく不透明な黄白色を呈する。なお文様部分には緑釉が落とされ、光沢がなく不透明な深緑色を呈する。(下田大真)

## 5. その他

### (1) 茶入 (14)

器高6.0cm、口径4.8cm、胴部最大径8.6cm、底径5.0cmの「大海茶入」である。平底で、胴部下方が直線的に開くが、中央で丸みを帯び上方がやや内傾する。肩には稜が入り、頸部は内傾し、口縁端部は折り返され玉縁状になる。底部外面には右回転の糸切り痕が残り、胴部内面から底部内面にかけてロクロ目が顕著である。胎土は白土系で、底部周辺を除き全面に施釉されるが、焼成不足のため光沢がなく不透明な薄茶色を呈しており、釉種は不明である。また肩の一方には緑釉が落とされ、光沢がなく不透明な深緑色を呈する。

(兵頭美江)

### (2) 色見 (15)

色見は、窯体内の取り出しやすい位置に置き、焼成中に引き出して釉薬の溶け具合を見るための窯道具である。器高3.9cm、上面径3.6cm、接地面径3.9cmで、末広がりの筒状をしており、上面には直径1.2cmの焼成前の穿孔がある。上面は調整不詳であるが、体部の内外面にはロクロ目がみられる。胎土は白土系で、全面に長石釉が漬け掛けにより施され、光沢はあるが不透明な白色を呈する。呉須（コバルト化合物を含む黒ずんだ青緑色の鉱石）による筆描きの縦線が外面には3カ所、内面には1カ所に認められ藍色に発色している。なお体部には漬け掛けの際の指痕が2方にみられ、その部分に長石釉は認められない。また接地面では釉薬が薄くなるため、何かの上に置かれ色見として使用されていたものと思われる。

(梶浦剛史)

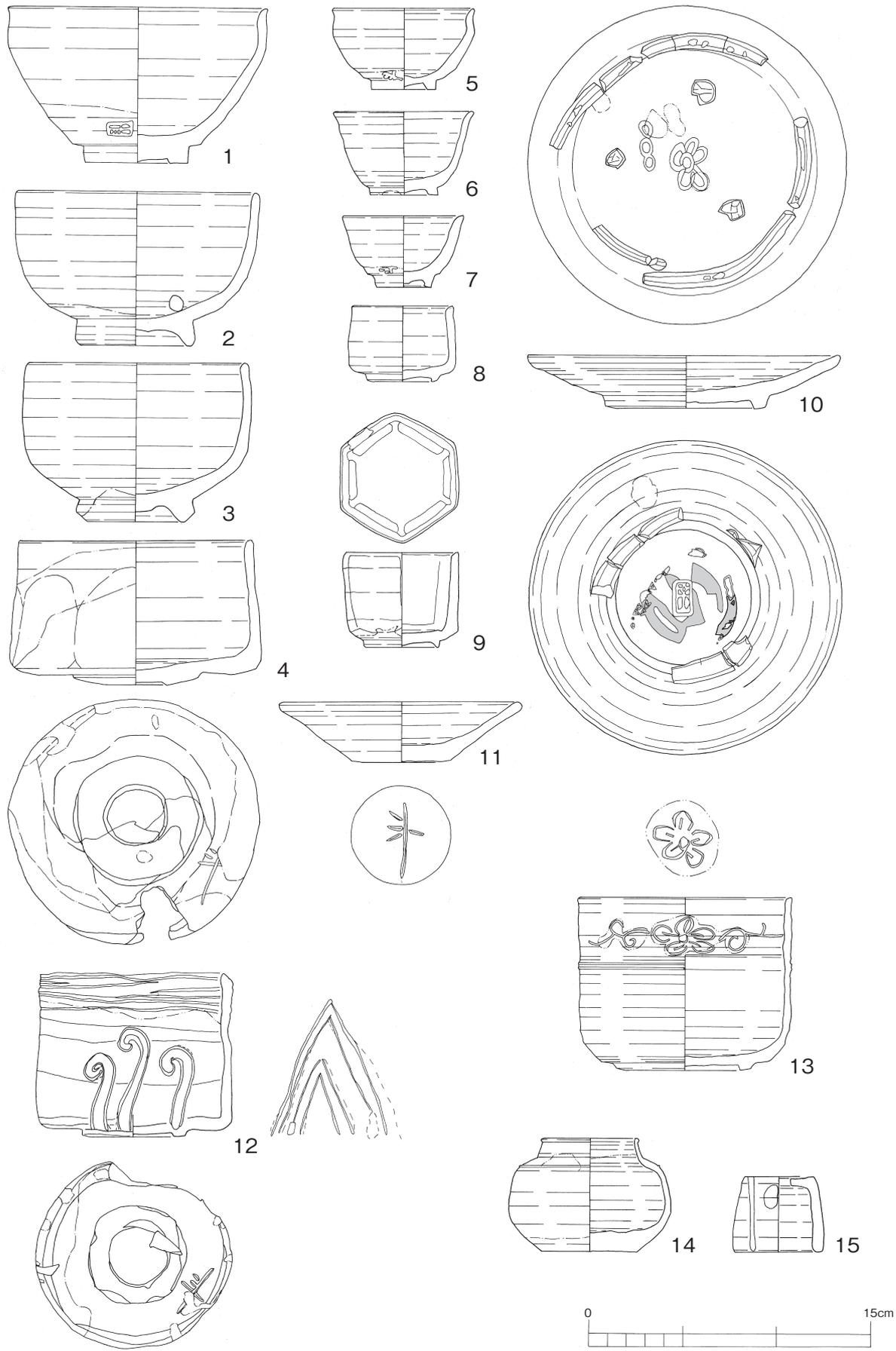
## おわりに

今回は、付編として故荒川豊蔵氏が製作した現代遺物の一部を報告した。それによって豊蔵氏は、胎土の選定から成形・施文・施釉・焼成の各工程において様々な技法（手法）を駆使し、美濃桃山陶の復原に取り組まれたことが少し理解できた。現代陶芸については全くの門外漢であり、また接合・分類も十分に検討できていないため、今回の器種分類の基準や技法等の説明は、次年度以降の報告で修正される可能性があることをお断りしておきたい。

(藤澤良祐)

表3 牟田洞窯跡第2次調査2グリッド出土遺物計測表

図	器種	法量 (cm)				注記番号	口縁残 存率%	高台残 存率%	胎土	釉薬	焼成	備考
		器高	口径	底径	高台径							
1	天目茶碗	8.2	13.6		5.4	MT2. 2G No.15.22	45	100	白土系	長石釉	不足	内底に輪ドチ痕
2	丸碗	8.1	12.6		5.8	MT2. 2G No.31.39.40.41	50	100	赤土系	灰釉	良好	内底に輪ドチ溶着
3	丸碗	8.4	11.2		5.0	MT2. 2G No.39	50	100	赤土系	長石釉	良好	内底に輪ドチ痕
4	筒形碗	7.6	12.0	3.2		MT2. 2G No.50	75	100	赤土系	長石釉	良好	白土 + 黒土
5	小天目	4.3	7.2		3.4	MT2. 2G No.55.56	80	100	白土系	長石釉	不足	
6	小杯	4.4	7.1		3.5	MT2. 2G No.50	100	100	白土系	長石釉	良好	内底に輪ドチ痕
7	小杯	3.8	6.3		2.9	MT2. 2G No.50	100	100	白土系	長石釉	不足	
8	小杯	4.0	5.2		3.7	MT2. 2G No.46	100	100	赤土系	長石釉	良好	
9	六角杯	5.0	6.0 × 6.9		3.8	MT2. 2G No.39	95	70	白土系	鉄釉	良好	
10	黄瀬戸中皿	2.8	16.5		8.5	MT2. 2G No.32.33.37	95	90	白土系	灰釉	良好	内外底に輪ドチ・団子トチ溶着、緑釉(胆礬)
11	土器皿	3.15	12.2	5.2		MT2. 2G No.55	100	100	赤土系	無釉	良好	
12	織部向付	8.6	9.6		5.4	MT2. 2G No.17.18.22	100	100	赤土系	長石釉	良好	口縁部に緑釉、模様部分に白釉と錆薬
13	黄瀬戸向付	9.1	11.2		5.9	MT2. 2G No	85	100	白土系	灰釉か	不足	緑釉(胆礬)
14	大海茶入	6.0	4.8	5.0		MT2. 2G No.33. 44. 47	70	100	白土系	鉄釉?	不足	緑釉(胆礬)
15	色見	3.9	上面径3.6、接地面径4.5			MT2. 2G No?	100	100	白土系	長石釉	良好	



第12図 牟田洞窯跡第2次調査2グリッド出土遺物実測図

## 引用・参考文献

- 荒井金一1968『字古城山古窯群第一号窯跡発掘調査』兼山町教育委員会・兼山町文化財審議会
- 竹内蘭山1968『字古城山古窯群第一号窯発掘調査中間報告』
- 竹内蘭山1969『古城山古窯址群発掘調査報告書（第一号窯）』
- 荒井金一1972「第七節 鎌倉時代」『兼山町史』岐阜県可児郡兼山町・兼山町史編纂委員会
- 兼山町1972『兼山町史』
- 榑崎彰一1976「美濃古陶の流れ」『美濃の古陶』光琳社出版
- 中島勝国・奥磯栄麓「可児地区」『美濃の古陶』光琳社出版
- 中野晴久1985「第10章第1節 A地点出土の甕口縁部に関する分類」『槍場・御林古窯址群 常滑市文化財調査報告書第15集』常滑市教育委員会
- 岐阜県教育委員会1990『岐阜県遺跡地図』
- 通商産業省工業技術院地質研究所1991『日本地質図体系 中部地方』朝倉書店
- 藤澤良祐1993『東海の中世窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター
- 中野晴久1996「盗器系中世陶器の生産」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』瀬戸市教育委員会・(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 可児市2007『可児市史』
- 長瀬治義2010「兼山（古城山）窯」『古陶の譜 中世のやきもの』MIHO MUSEUM
- 安井俊則・中野晴久2012「押印・刻文」『愛知県史 別編窯業3 中世・近世常滑系』
- 長江真和ほか2013『金山城発掘調査報告書』可児市教育委員会
- 山本智子2013「古城山窯跡の出土遺物について」『上県2号窯跡第7次発掘調査概要報告書』愛知学院大学文学部歴史学科
- 愛知学院大学2019『古城山窯跡第1次調査概要報告書・広久手F窯跡窯体再実測および範囲確認調査報告書』愛知学院大学文学部歴史学科

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	こじょうざんかまあと							
書名	古城山窯跡第2次調査発掘調査概要報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知学院大学考古学発掘調査報告							
シリーズ番号	30							
編著者名	藤澤良祐・山本智子・加藤 怜・子安優翼・坂井 航・下田大真・福田治也 万年美紀・山田美咲・大平悠希・荻野貴史・梶浦剛史・加藤悠華・栗山美里 杉村有亮・洲崎拓真・寺井崇浩・兵藤美江・水野啓吾・森本帆乃夏							
編集機関	愛知学院大学文学部歴史学科							
所在地	〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 TEL 0561-73-1111							
発行年月日	令和2年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古城山 古窯跡群	岐阜県可児市 兼山古城山 1418-10・11	21214	4476	35度 27分 19秒	137度 06分 27秒	20180813～ 20180825	55.15㎡	学術研究
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
古城山窯跡	生産遺跡	鎌倉時代	窯体2基 (1号窯) (2号窯)		甕・広口壺 片口鉢・焼台			



1号窯全景 調査前 (西から東)



1G 全景 調査前 (東から西)



Dトレンチ全景 調査前 (東から西)



A区右全景 (北から南)



C区右全景 (北から南)



D区左全景 (南から北)



E区右全景 (北から南)



G区右全景 (西から東)

図版1 古城山窯跡第2次調査遺構(1)



F区左全景 (南から北)



1G全景 完掘後 (東から西)



1Gサブトレンチ (西から東)



Cトレンチ中央全景 (西から東)



Cトレンチ南 東壁



Dトレンチ全景 (北から南)



Dトレンチ 分炎柱 (南から北)



Eトレンチ全景 完掘後 (南から北)

図版2 古城山窯跡第2次調査遺構(2)



図版3 古城山窯跡第2次調査出土遺物(1)



图版4 古城山窯跡第2次調査出土遺物 (2)



図版5 牟田洞窯跡第2次調査2グリッド出土遺物(1)



図版6 牟田洞窯跡第2次調査2グリッド出土遺物(2)



図版7 牟田洞窯跡第2次調査2グリッド出土遺物(3)



図版8 牟田洞窯跡第2次調査2グリッド出土遺物(4)

---

**愛知学院大学考古学発掘調査報告30**  
**古城山窯跡第2次発掘調査概要報告書**

発行日 2020・3・31

発行者 愛知学院大学文学部歴史学科

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

Tel (0561) 73-1111 Fax (0561) 73-8179

編集 考古学コース 藤澤良祐・山本智子

印刷 株式会社 あるむ

---

